

# 「アフリカ子ども学の試み そのねらいと展望」

亀井伸孝（愛知県立大学准教授）

## はじめに

今日は、私がアフリカ研究の仲間と取り組んでいる「アフリカ子ども学」という試みのご紹介と、私が行ってきたアフリカ熱帯雨林の子どもたちの遊び、教育、暮らしなどのお話をさせていただきます。

私は文化人類学、つまり人間の多様性について学ぶ学問を専門としていますが、研究室の中でではなく、世界各地に出かけて行ってフィールドワークをしています。もとは理学部の人類学講座におりました。同僚などはアフリカの熱帯雨林でチンパンジーやゴリラの調査をしているような研究室にいましたので、人間への関心と理解の根っこ部分は生物としてのヒトの普遍性にあり、進化論の延長線上に人間の文化や社会をとらえているような面があります。

もっとも、人間というのは進化の中で定まった生き方をもって人生をまっとうするわけではなく、さまざまな文化的・社会的な要素を習得し、それを子どもたちに伝承していくという形で、文化的多様性が花開く生き物でもあります。その文化的多様性について、私は頭で考えるよりも、一緒に遊んだり、踊ったり、食べたりしながら記録をしていくことが大切だと思うようになりました。

これまでアフリカ熱帯雨林で、狩猟採集民の生活全般を調査し、とりわけ、子どもたちの遊びや生業、狩猟や採集を覚えながら実践している様子を研究してきました。また、アフリカのろう者たちがどのような言語を話しているのかといったことについて、言語学的な要素も含んだ調査も行ってきました。

いくつかのテーマで並行して調査をしていますが、共通しているのは、長期で現地に滞在するということです。その際、「参与観察」、つまり生活をともにし、相手の言語を覚え、日常生活の会話やふるまいの中で相手の文化を自然な営みのまま体験を通じて学ぶという文化人類学の主流のやり方を使っています。これまで訪れたのは8カ国ですが、今日はそのなかからカメルーン南部の熱帯雨林域に暮らす子どもたちの話をいたします。

## アフリカの国々

アフリカ大陸は、ユーラシア大陸に次ぐ世界第2の

広さを持つ広大な大陸です。アフリカが私たちにとってなぜ重要なのかというときの原点は、私たちヒト、そして、その前の直立二足歩行をする霊長類であるところの人類の発祥の地がアフリカであるという点にあります。ヒトの起源についても諸説ありましたが、今日ではほとんどの科学者が「単一起源説」、つまり、ヒトはアフリカで単一の種として出現し、この数万年のうちに世界中に拡散していったという説を支持しています。言いかえれば、私たちは熱帯アフリカの乾燥帯に適した身体や行動の特徴をもつ生物として出現したということです。

アフリカには現在、55の国・地域があります。ただ、アフリカを学ぶ上で、国境に過度にとらわれるのはあまり適切ではありません。というのは、アフリカの多くの国が独立したのが1960年代頃と、比較的最近のことだからです。

20世紀初頭のアフリカの地図を見ますと、当時はフランス、イギリス、ベルギー、ドイツ、イタリア、スペイン、ポルトガルの7カ国の植民地に分割されていました。アフリカ分割・植民地化は、それ以前のアフリカの国家や制度を無視する形で行われ、その痕跡が現在の国境となっています。ですから、アフリカを知るときには、国境を1回取り去って地域特性を学んでいくといった視点も重要になってきます。

## 多様な気候、植生、文化

アフリカは、まず北アフリカとサブサハラ（サハラ以南）アフリカという2つの地域に大別してとらえることが一般的です。世界最大の砂漠であるサハラ砂漠は、自然の障壁となって人や文化の往来に影響しました。そして、サハラ砂漠の北側にはアラブ系の人たち、サハラ砂漠以南にはアフリカ系、つまり黒人系の人たちが多く暮らすというふうに、まず2つに分けて理解することができます。

次に、アフリカを考える上で見逃せないのは、気候や植生の多様性です。大陸の中央部の赤道直下のあたりに熱帯雨林が広がっていて、そこから周縁に向かって乾燥の度合いが進んでいきます。非常に湿ったアフリカもあれば、乾いたアフリカもあります。砂漠もあれば、見晴らしのよい草原であるサバンナも、緑に覆われた熱帯雨林もあります。ちなみに人類がどこで出

現したかは諸説ありますが、現在、多くの霊長類が暮らしている熱帯雨林ではなく、乾燥した東アフリカあたりで二足歩行を始めたのではないかといった説が有力です。

この環境の多様さに適応したさまざまな文化を身にまとった人たちが、それぞれの環境に適応した生業活動、たとえば狩猟、採集、漁労、牧畜、農耕といった活動で食物を得て、生活を営んでいます。最近、特に沿岸域を中心に人口の集中が起こって、経済開発の成果などとも相まって、都市部で暮らす人たちも増えてきているという状況です。

アフリカの多様性を考えるときに、言語も一つの側面となります。アフリカには多くの民族諸語が分布しており、その数は約千種類以上とも言われています。同じ国の中に、20も30も言語があるのが一般的です。

では、どのような言語で国民国家を営んでいるかと言いますと、さまざまな民族諸語がある地域に、ある程度共通する地域共通語というのが生まれます。さらに、そこに植民地化のプロセスで英語やフランス語といった共通言語が教育でもたらされ、行政や司法、経済、教育などの分野では英語やフランス語が用いられているという状況があります。

さらに、宗教的にもアフリカは非常にモザイク状の世界です。大雑把に言えば、北から東の沿岸にかけてイスラーム、中部から南部にかけてキリスト教が分布しています。これ以外にもさまざまな伝統宗教が存在しています。

つまり、「アフリカの子ども」と一口に言っても、いろいろな社会があるので。毎年アフリカだけでも何千万人と子どもたちが生まれていますが、その子どもたちはそれぞれ異なる文化の中で育ち、学んでいるということです。

## バイアスのある「アフリカの子ども」のイメージ

日本社会に暮らしている私たちが「アフリカの子ども」をイメージするとき、まず思い浮かべるのは飢餓でやせ細った子どもや、児童労働、性暴力、死亡率の高さ、女子割礼など、さまざまな暴力や政治経済的な抑圧の中で苦難にさいなまされている子どもたちというイメージかもしれせん。しかし、実際、アフリカのさまざまな社会に分け入って学んでいると、こういう面が皆無とは言えませんが、すべてではないことも見えてきます。このイメージと実態のずれに、私は違和感を覚えるようになりました。これが、「アフリカ子ども学をやりませんか」と仲間呼びかけたひとつのきっかけです。

国際 NGO やマスメディア、社会貢献活動をしている企業などが、ポスターや広告にやせ細った黒人の子どもたちを使いたがる傾向があります。おそらくそこには、援助や寄付行為などの事業を円滑に進めたいという意図があるのですが、それによってアフリカの子どもたちのイメージが特定の方向に導かれてしまっているということ、私たちはまず知る必要があると思います。

そもそも、こうした困難な状態にアフリカの子どもが置かれているというのは、多くの場合、おとなが原因をつくっています。その原因をつくっているおとなたちが、子どもたちを無力な存在、弱い存在というようなイメージで描いてしまっています。おとながおとなのために子どもを利用して、またおとなのために勝手に納得しているといった図式に見えてなりません。

それから、先進国の物差しをアフリカにあてがって、ここまでしか達成していないという未達成の表現をしてみがちですが、そもそもの物差しが違う者同士として、もっと対等に出会うことはできないのかなということを考えていました。また逆に、「いやいや、アフリカの子どもはそんなに大変ではなくて」と言いたいあまり、「素朴な笑顔」「輝く瞳」などの情緒的な表現で語ることがしばしばありますが、それも、手前勝手な理解に陥ってしまいがちではないかということを考えていました。

## 人口が急増する大陸

国連が発表している人口推計を見ると、アフリカは鮮やかなピラミッド型をしています。日本が戦後、高度成長期に向かう 20 世紀中葉あたりに示した人口爆発の時代と似たような形で、今なお人口が増加しています。

世界の人口の多い国トップ 10 を見ると、現在はナイジェリアが 7 位に入っていますが、40 年後には 1 位のインド、2 位の中国に次いでナイジェリアが 3 位になり、エチオピアもトップ 10 に入ってきます。そして 100 年後には、人口トップ 10 のうち 5 カ国までをアフリカが占めるといわれています。ということは、世界経済にもアフリカという大きなマーケットが出現するわけです。アフリカにいる子どもたちは、決してか弱く痛々しい存在ではなく、むしろ今後の世界を牽引する存在になっていくという見方もできます。

前置きが長くなりましたが、アフリカの子どもたちは、マイナーな地域のマイナーな人たちではなく、私たちが今しっかりと目を見開いて、出会って、そこから多くを学ぶべき相手であると言えます。人口の半数近くが若年層であるといわれている若い大陸を理解

するためには、子どもたちのことを学ぶことが欠かせません。そのためにも、日常生活の普段着のアフリカの子どもに出会うという試みがあってよいのではないか。そういう思いでマニフェストを書き、仲間を集めて、「アフリカ子ども学」という集まりを始めました。

## 私が出会ったアフリカの子どもたち

私がカメルーンでどのような調査をしてきたかをご紹介します。

カメルーンは、南北に細長い国で、南の方は熱帯雨林域に入っています。その最南端地域のピグミー系狩猟採集民バカの集落に、1年以上住み込んでお世話になりました。

バカの人々は、伝統的な小屋をつくり、森の中を狩猟採集しながら遊動していく生活をしています。最近では政府の指導や貨幣経済も入ってきたことから定住する家も持ち始めて、定住生活と遊動生活を季節によって使い分けています。

以前は学校がなかった地域ですが、カトリックのキリスト教会がフランス語と算数を教える寺子屋のような私立学校をつくり、そこに子どもたちを通わせています。ただ、もともと狩猟や採集の都合に合わせて遊動する人たちなので、その季節が来ると、子どもたちも集団で定住村からいなくなってしまう。教会のほうも、狩猟採集の季節が終わって戻ってきたら続きをやればいかとといったぐらいの、実にはどかな、束縛のゆるい学校教育をしています。

こういう集落に行くと、私は褐色の肌の顔をしていないので、まず子どもたちには気味悪がられます。ギャーギャー泣かれて、最初はつらかったものですが、飴を配ったりして、なんとかなだめます。

言葉も最初は通じませんが、牛や犬、家などの絵を描いて、そのあたりの言葉から教えてもらいました。私が「何の絵でも描くよ」と言って、実際に描かせていたので、「あれも描いて」「これも描いて」と、みな変わったものを見せに来るといった関係になり、ずいぶんと仲良くなれました。おとなが「うちでヘビがとれた」と言って、血まみれのヘビをぶら下げたりしたのにはびっくりしましたが。

いずれにせよ、あわててデータをとりようとしたりせずに、まずは体当たりで入って行って、踊ったり、おしゃべりしたり、時間をぜいたくに使っていました。そのうち言葉がだんだんわかるようになり、生活習慣がわかりといった感じで、最初はクモの子を散らすように逃げていた子どもたちが、いつしか私のテントの周囲を居場所として使い始めるようになりました。(この後、写真を投影しながら熱帯雨林、農村、都市

などのさまざまな環境で暮らすアフリカ諸国の子どもたちの生活、教育、労働、遊びなどの様子を紹介する)

## 「アフリカ子ども学」の発足

「アフリカ子ども学」という集まりについて、少しお話をさせていただきます。

大学時代、私は1年半、先ほどご紹介したカメルーンの熱帯雨林で生活し、その調査をもとに博士論文を執筆しました。さらに、2010年にその研究をもとにした『森の小さくハンターたち——狩猟採集民の子ども民族誌』(京都大学学術出版会)という単著を刊行しました。

また、アフリカの子どもたちと森の中で一緒に遊びながら、おもちゃを集めたり、遊びのルールなどを記録したりして遊びのコレクションを続けるなかで、日本など他の地域の子どもの遊びと何が同じで何が違うのだろうと関心が深まっていきました。帰国後、日本の子どもの遊びや、ニホンザルやチンパンジーなどの動物の遊びの研究をしている人たちとの結びつきができ、それがきっかけとなって『遊びの人類学ことはじめ——フィールドで出会った子どもたち』(昭和堂)という論集を作りました。

さらに、2010年には、アフリカ日本協議会(AJF)というNGOのスタッフをしている知人が、『森の小さな〈ハンター〉たち』を手がかりに『アフリカ子ども学』を考える: 亀井伸孝さんに子どもたちと過ごす中で感じたこと、考えたことを聞く」という私の本の公開書評会を開いてくれました(アフリカ日本協議会の機関誌『アフリカNOW』における「アフリカ子ども学の試み」特集として刊行)。この会でいろいろな分野の方と意見交換をするなかで、私が取り組んでいること、見落としていることに気づかされると同時に、皆でアフリカの子どもに関して議論する場を持つと意気投合しました。

そして、翌2011年、さまざまな地域でアフリカの子どもたちに接してきた人たちで、これまで見聞してきたアフリカの子どもたちの状況を発表し合おうと、名古屋に集まりました。これが「アフリカ子ども学を語る会」の第1回の集まりです。テーマは「学校」としました。

## アフリカ子ども学、その後の歩み

「アフリカ子ども学を語る会」は、翌2012年には「徒弟制」をテーマにした会合をもちました。学校に行かず、親方のところで何年間も手作業を学んで職人になっていくといった育ち方をする子どもたちの話



です。このような成果をたずさえて、2012年の国際人類学民族学連合（IUAES）中間会議という世界人類学の大会で、アフリカ子ども学をテーマに分科会も組みました。テーマは「Contemporary African Childhoods（今日のアフリカの子どもらしさ）」です。Childhoodに複数形の「s」をつけたのは、文化的な多様性、いくつものアフリカの子どもらしさがあるのだというメッセージを込めています。

2013年には、第50回日本アフリカ学会学術大会で、分科会「アフリカ子ども学フォーラム：フランコフォン・アフリカの学校教育と「伝統」教育」を開催しました。また、同じ年、セネガルの首都ダカールで、ワークショップ「近代化する社会における子どもたちの教育と仕事：アフリカとアジアの新しい視座」を開き、メンバー3人がアフリカの子どもについての発表をして、アフリカの研究者たちと意見交換する機会も設けました。また、この年のアフリカ子ども学研究会は、「周縁化された子どもたちと教育」というテーマで開催しました。

2014年5月のIUEAS中間会議は、日本が主催者となって千葉の幕張メッセで開催されます。アフリカ子ども学の主要メンバーが中心となって、分科会「子どもの／子どもとの学び：『学校』における人類学者」の準備を進めています。このように議論を重ねる中で、私たちが少しずつ関心の範囲を広げてきたことを実感しています。

## アフリカ子ども学のこれから

私たちがアフリカの子どもに出会うとき、気づいたら「先進国のおとなの目線で見ている」ということがしばしばあります。その文化を生きる当事者のまなざし——文化人類学では「エミック（emic）な視点」と言いますが——を重視して、擬似的な当事者の立場に立って、その生の声に耳を傾け続けるということが重要だと考えています。

たとえば、「児童労働」というテーマを扱うにしても、それはよくないことだから撲滅すべきである、学校教育の妨げになり、心身にも悪い影響を及ぼすといった指摘があります。確かに事実を言い当てている側面もありますが、生き生きと労働している子どもたちが、実際に現場で何を考えているのかということ、まずは受け止めたいたいです。また、おとなになったアフリカの人たちも、かつては子ども時代があったわけで、子どもとして自分たちはどのように感じていたのか、きちんと向き合っていきたいと思います。

アフリカについて紹介するとき、私たちは、アフリカを格下に見ることなく、かといって「手つかずの未

開の文化がすばらしい」などと奇妙な持ち上げ方をするのではなく、同時代の対等なパートナーとして出会っていきたいものです。お互いの社会についての情報を交換し合うことは、究極的には、人間とは何だろう、子どもとは何だろう、学びや育ちとは何だろうといったことを考えるためのよい事例となるに違いないからです。

今、私はアフリカの子どもをテーマとした映画作品を集めており、「映画で学ぶアフリカ子ども学」などのアイディアも温めています。有意義な意見交換を続けていければと思っています。

日本の、子ども学にかかわっている皆さん、アフリカに関心を持ち、可能であればアフリカまでご一緒に、子どもたちに出会っていただければと思います。そこから何らかの学びのヒントを得ていただくことがあればと、楽しみにしています。

（第4回「子ども学カフェ」講演会より／

2014年4月26日／慶應義塾大学三田キャンパス）

## 追記

講演後の2014年9月に白百合女子大学で開催された第11回子ども学会議において、私、清水貴夫（総合地球環境学研究所）、山田肖子（名古屋大学）、竹ノ下祐二（中部学院大学）の4名の「アフリカ子ども学」メンバー、そしてコメンテーターとしてガーナ出身のスイアウ・オンウォナ・アジマン准教授（東京農工大学）にも加わっていただき、シンポジウム「文化的・社会的環境で育つ子ども：アフリカ子ども学の試み」が行われました。シンポジウムの様子は、『チャイルド・サイエンス Vol.11』に掲載されています。

### ■関連ウェブサイト

- ・アフリカ子ども学 Studies on African Childhood  
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/syamada/researchproject.html#research03>
- ・『森の小さな〈ハンター〉たち：狩猟採集民の子どもの民族誌』  
<http://kamei.aacore.jp/kyoto-up2010-j.html>
- ・『アフリカNOW』90号（特集：アフリカ子ども学の試み）  
[http://www.ajf.gr.jp/lang\\_ja/africa-now/2011.html#90](http://www.ajf.gr.jp/lang_ja/africa-now/2011.html#90)
- ・立命館大学生存学研究センター「アフリカの子ども」  
<http://www.arsvi.com/i/2-child.htm>

### 〈プロフィール〉

亀井伸孝（かめい・のぶたか）

愛知県立大学外国語学部国際関係学科准教授。京都大学大学院理学研究科修士、博士（理学）。関西学院大学、東京外国語大学、大阪国際大学を経て、現職。文化人類学・アフリカ地域研究。単著に『森の小さな〈ハンター〉たち』（京都大学学術出版会、2010）、『アフリカのろう者と手話の歴史』（明石書店、2006）、『手話の世界を訪ねよう』（岩波ジュニア新書、2009）、編著に『遊びの人類学とはじめ』（昭和堂、2009）、共著に『公共人類学』（東京大学出版会、2014）ほか。日本文化人類学会理事（講演当時）、日本アフリカ学会評議員。